

# くるみ割り人形とフォークアート

2014年11月1日 朝日カルチャーセンター立川 岡部由紀子

## <くるみ割り人形の登場する話>

- 1816年 『子供のための童話集』に、E.T.A. ホフマンの「くるみ割り人形とネズミの王様」の話が載る。  
„Kinder-Mährchen“ Ernst Theodor Amadeus Hoffmann (1776 -1822)  
日本語版:クルミわりとネズミの王さま 上田真而子訳 岩波書店 2000年
- 1819-21年 『ゼラピオン同人集』- E.T.A. ホフマンの作品集に「くるみ割り人形とネズミの王様」が収録される。  
„Serapions-Brüdern“
- 1840年 『くるみ割り人形とネズミの王様 -E.T.A.ホフマンの子供のためのお話』  
挿絵:P.C.ガイスラー Peter Carl Geissler
- 1845年 『くるみ割り人形物語』 アレクサンドル・デュマ・ペール (フランス語翻案)  
„Histoire d'un casse-noisette“ Alexandre Dumas père (1802 - 1870)  
日本語版:くるみ割り人形 小倉重夫訳 東京音楽社 1991年
- 1851年 『くるみ割り王とかわいそうなラインホルト』 ハインリッヒ・ホフマン作・画  
„König Nußknacker und der arme Reinhold“ Heinrich Hoffmann (1809 - 1894)  
日本語版:くるみ割り王とあわれなラインホルト おおたに みな訳 創英社 2000年
- 1892年 チャイコフスキー作曲、バレエ「くるみ割り人形」がサンクト・ペテルブルグで初演  
Pjotr Iljitsch Tschaikowski 台本:マリウス・プティパ: Marius Petipa

## ーくるみ割り人形はどのように描かれたかー

E.T.A. ホフマンの挿絵 →

### E.T.A. ホフマンの「くるみ割り人形とネズミの王様」

長いがっしりとした胴体に短く細い脚、ひどく大きな頭が不釣り合い  
薄緑色の飛び出た大きい目、手入れの行き届いた白い綿の髭、真っ赤な口  
きちんとした服装、白い飾り紐とボタンがたくさんついた美しいすみれ色の軽騎兵の上着とズボン  
木でできているような幅の狭いへんてこなマント、脚にぴったりと付いたすばらしいブーツ、坑夫帽



### アレクサンドル・デュマ・ペールの「くるみ割り人形物語」

金モールで縁取りされたすみれ色のベルベット製のフロックコートとズボン  
スイスの農民のような帽子

Bertall の挿絵 →

### ハインリッヒ・ホフマン 「くるみ割り王とかわいそうなラインホルト」

偉大で立派で大柄で、笏を持ち、王冠をかぶり、赤いズボンをはいている

ハインリッヒ・ホフマンの挿絵 →



## — 謎めいた話 —

不思議な出来事が起こる時間帯は？

繰り返し出てくる数字は？

繰り返し出てくる色は？

大事なモチーフ、噛むこと

くるみ割り人形に大きなクルミを噛ませて、歯を折る

「王女を私に噛み裂かれないように、よく注意することだ」

王女には生まれながら歯があって、生まれてすぐに大臣に噛みついた。

「おまえのくるみ割りを噛み砕いてやる」

ガラス戸棚からでて、ネズミとの戦いに参加するものは何でできているか？

最初に棚から飛び出す人形 … 綿入りの布

竜騎兵、軽騎兵 … 錫と鉛の合金(デュマ) 木？

中国の皇帝が率いる混成隊 … 砂糖人形(デュマ) グミ人形？ マジパン人形？

最後に出てくる予備軍 … 金色の顔をして、帽子とかぶとも金色の褐色の男女 (トルン製蜂蜜入り菓子)

トルン (Thorn) は、当時はプロイセン領、現在ポーランド、蜂蜜入り菓子で有名

名付け親のドロッセルマイヤーと、昔話の時計師ドロッセルマイヤーは同一人物？

両者とも、時計を直すことが得意

クリスマスイブの真夜中、時計の上に座っているおじさん

→ 時をあやつることができることを象徴？

ドロッセルマイヤーおじさんは、ガラス製のカツラを着け、片目に眼帯をしている。

固いクルミを捜す長旅で、南国の太陽にさらされて毛が抜けてしまった。(デュマ)

カリブの酋長の矢があたって、右目を無くした。(デュマ)



デュマの本 Bertall の挿絵

ドロッセルマイヤーとくるみ割りの間に流れる複雑な感情

マリーがドロッセルマイヤーおじさんの名前を出すと、くるみ割りは口をゆがめ、目から緑の火花が散った。

醜いくるみ割りに姿を変えられたのは、時計師ドロッセルマイヤーのせいだと、くるみ割りは恨んでいる。(デュマ)

E.T.A. ホフマン

素材を提供、19世紀初頭の市民階級のクリスマス風景を丁寧に描いた。昔話を現実世界と結びつけた点は、当時の子供向けの話と一線を画す。

アレクサンドル・デュマ・ペール

ホフマンの話の細部を補完して、つじつまを合わせ、娯楽性を高めた。

チャイコフスキー

昔話の部分を抜かしたことにより不気味な要素を薄め、わかりやすい筋とした。クリスマスのおもちゃとお菓子に心躍らせる子供の世界を、ファンタジーで表現した。

## ーフォークアートとしてのくるみ割りー

### クルミ (Juglans regia)

中央アジアから地中海東部が原産地とされ、ペルシャグルミとも呼ばれる。

ギリシャからローマを経てドイツへもたらされ、当初栽培植物として農家の庭先や畑に植えられた。

野生化して寒さに強い品種も生まれ、ライン川やドナウ川沿いの森などに広がっていった。



### シンボルとしてのクルミ

栄養に富む甘い核果は贅沢品や薬として珍重され、豊穰や幸運のシンボルでもあった。

古代ギリシャでは、ゼウスとアルテミスへの捧げもの

ゲルマン人は、豊穰、愛、太陽の女神フレイヤに捧げた

キリスト教においては、クルミの果肉はイエスの体、殻は骨、核果は魂に喩えられた(アウグスティヌス)

固い殻 … その中に広大な世界や新しい命を秘めている

#### グリム童話「千匹皮」 Allerlei-Rauch

王である父に求婚された娘は、太陽のような金色の服、月のように白い服、星のように輝く服の3着をクルミの殻の中にしまい、千種類の毛皮から作られたマントをはおって城から逃げ出す。後に城で下働きをすることになるが、舞踏会のたびに、クルミの殻から美しい服を取りだし、それをまとって王の心を射止める。



クリスマスとは切っても切れない縁

ニコラウス(カトリック)や、幼子イエス(プロテスタント)からの贈り物は、リンゴとクルミ

クリスマスツリーの飾り … 金の紙で包まれたり、金色に塗られたクルミ

クルミの殻に入った幼子イエスの人形 イエスの生誕場面



### クルミを何で割ったか

手、歯、道具(石、金属、木、プラスチック)

ペンチのようなもので挟む、槌子の原理を利用する、スクリュー式のねじで圧迫する

### くるみ割りの造形

実用的な形 → 彫刻などの装飾を施す → 飾り物として遊びを加える

モチーフ: 諷刺の対象、エキゾチックな像: 托鉢僧、ナポレオン、王様、トルコ人

動物(犬、鳥、リス、その他の野生動物)

制服姿の者(権威の象徴) 警官、兵隊、森林管理官、消防士

強面のグロテスクな造形 → 愛玩の対象、子供のおもちゃ(クリスマスの贈り物)

くるみ割り人形のイメージを変えたきっかけは、19世紀に書かれた子供向けの話やバレエ



### ドイツ語の慣用表現

Das war eine harte Nuss! これは難問だ、厄介な案件だ。

Er bekommt eine harte Nuss zu knacken. 彼は、難題をしょいこんでいる。

## くるみ割り人形はどこから来たのか？

主にくるみ割りの像制作の記録がある所(ドイツ)

- レーン Rhön(チューリンゲン州) 18世紀初頭
- ゾンネベルク Sonneberg(チューリンゲン州)1735年
- ベルヒテスガーデン Berchtesgaden(バイエルン州)1650年
- エルツ山地 Erzgebirge (ザクセン州)18世紀

アルプス周辺の地域では、木工芸が盛んだった。

イタリア東部、オーストリア西部、スイスなどでも、木彫りのくるみ割りの像が作られていた。16世紀～

ザルツブルク近郊でも、20世紀後半、素朴な絵付けの轆轤細工のくるみ割り人形が作られていた。



## エルツ山地とくるみ割り人形

1730年	エルツ山地 Erzgebirge (ザクセン州)でおもちゃの生産の記録 17世紀末から18世紀始めにかけての鉱山業の衰退と共に、木工芸が盛んになった。
1745年	エルツ山地産のねじ式くるみ割りが、ドレスデンでのクリスマス市で売られる。
1816年	E.T.A. ホフマンの「くるみ割り人形とネズミの王様」
1845年	アレクサンドル・デュマ・ペールの「くるみ割り人形物語」
1851年	ハインリッヒ・ホフマンの「くるみ割り王とかわいそうなラインホルト」
1870年	エルツ山地・ザイフェン Seiffen のヴィルヘルム・ヒュフトナー Wilhelm Füchtner (1844 - 1923) 現在のくるみ割り人形の原型となる人形を、 <sup>ろくろ</sup> と <sup>のみ</sup> で作る。(職業は大工) 足先、眼球は、木くずを糊で固めたもので作った。(後継者は口髭も) トウヒ材で、王様、森林監督官、警官、兵隊などを制作。 気むずかしい顔をしていたくるみ割り人形を、親近感をいだかせる造形へと変える
1892年	チャイコフスキー作曲、バレエ「くるみ割り人形」がサンクト・ペテルブルグで初演
19世紀末	アメリカでくるみ割り人形の人気が高まり、輸出が増える。
19世紀末 ～	エルツ山地では、木製のくるみ割り人形が、盛んに作られる。 小規模の家内工業で、子供から老人まで家族総出の仕事 材料は、地元産のトウヒ、ブナ、ハンノキ、シナノキ
第二次世界大 戦後の復興期	東ドイツ・エルツ山地のザイフェンに、木工品の共同制作所が開設され、大量生産の道が開かれる エルツ山地の木工品は、東ドイツを代表する輸出品となり、第2の最盛期を迎える。
1990年～	旧西ドイツや外国の資本が入り、木工品は質より量を求められ、造形も大きく変化。 伝統的な丁寧な細工物は、消えつつある。製品の8割は、(その大半はアメリカへ)輸出されている。